

# 螺鈿 —北村昭斎のわざ—

(工芸技術記録映画 35ミリ 35分) 企画 文化庁 製作 日経映像

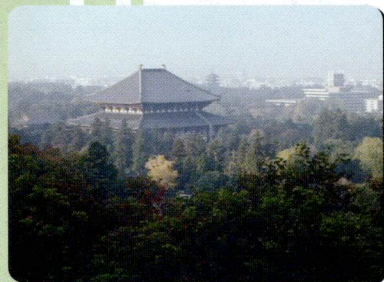
この映画は、重要無形文化財「螺鈿」の保持者である北村昭斎が、日本の伝統工芸・螺鈿の技術により、材料の貝片を使って作品「瑞鳥唐花文螺鈿箱」を完成させるまでを克明に記録したものです。

まず、器のボディーとなる木地を作り、布を着せて補強し、漆を塗り重ねてゆきます。塗り上がった器を貝で装飾します。貝による装飾こそが螺鈿という技法です。映画の中で、緻密な仕事に情熱を傾ける北村昭斎が、伝統工芸の技と心の世界について語ります。



## プロローグ

国の重要無形文化財「螺鈿」の保持者である北村昭斎は、貝の妖しいまでの輝きに魅せられて、螺鈿の道を歩んできた。伝統を礎に、自らの緻密な技を使って、北村は、貝に命を吹き込み続けている。



## 奈良 東大寺

古都・奈良の町が夜明けを迎える。  
東大寺の近く、聖武天皇御陵に面した一条通りに北村昭斎の工房がある。



## 北村の代表的な螺鈿作品

北村は、徹底して古典作品を研究し、古人の技を習得してきた。その積み重ねの上に現代作家としての自分を表現する北村の代表的螺鈿作品には、貝の美しさに魅せられた北村の心が映し出されている。



## 北村作品のモチーフ

北村は、奈良の町や社寺の境内を散歩をしても、貝のモチーフについて考えてしまう。

かすがのたいまいらでんまきえりようしほこ  
「春日野玳瑁螺鈿蒔絵料紙箱」のデザインも、散策から生まれたものだ。





## 北村インタビュー

北村の語り  
「螺鈿制作の魅力は、貝の持つ神秘的な色合いや輝きを作品に活かしていくことの難しさと楽しさである。」



## 新作の意匠図作成

新作のイメージの構想を練る北村が語る。「螺鈿は中国から日本にもたらされた技法で、日本の美術工芸の基礎とも言える。新作の副題を『天平の春』とし、日本の国鳥・キジと中国の花の王・牡丹を用い彫りを使って自分なりの技法で表現してゆく。」



## 木地を作る

作品のボディーとなる木地作りを始める。厚さ1ミリの檜の柾目板を重ねて木地を作る。板の内側に筋目を入れて思う形に曲げて仕上げる方法で行うこの木地作りは、原型を作る必要がないことが利点である。



## 木地に布を貼り漆を塗る

出来上がった木地に岩手県産の良質な漆で布を貼って補強し、さらに下地を整え、その上に漆を塗り重ねる。日本産の良質な漆を使うことで、堅牢で軽く、しかも見た目も美しい器に仕上げることができる。



## 夜光貝の加工

螺鈿材料の一つには夜光貝の厚貝を選んだ。夜光貝は日本では列島の南の奄美・沖縄地方で採れる美しい輝きを秘めた貝である。螺鈿に使える部分が切り出され、さらに研磨され、螺鈿素材として整えられる。



## 文様を貼った貝を切る

文様の形に合わせて素材の夜光貝と白蝶貝を選び、夜光貝の裏面に文様を貼る。花や鳥の羽の部分などの緻密な形を糸鋸で切り出す。微妙な力加減で糸鋸を使う。北村の糸鋸は筆で絵を描くように貝を切る。





螺鈿玉帯箱 一正倉院宝物一

## 正倉院宝物

北村の父・大通も漆芸家として活躍した。

正倉院宝物「らでんぎょくたいぼこ螺鈿玉帯箱」を復元模造している。

また、春日大社の「まきえのそう蒔絵箏」を北村親子は合作で復元した。



## 漆塗りと地下げ

北村が器に漆を塗り重ねる。漆が乾くと、文様の輪郭のとおり印をつけ、輪郭の内側を彫り下げる。これを地下げとよんでいる。



## 貝を嵌めやすりがけする

地下げした部分に牡丹の形の夜光貝を嵌め込む。器の曲面に合わせるために、貝の裏面を削り、やすりをかけ、微妙な調整を繰り返す。小麦粉の糊を混ぜた接着力の強い漆で接着させた後、表面をやすり掛けして同じ高さにとろえる。



## 玳瑁を器に嵌め込む

貝の他に、海亀の甲羅である玳瑁も材料として使うことにした。北村は語る。「奈良時代には、螺鈿の輝きを引き立たせるために玳瑁が使われていた。この作品にも玳瑁を細く使って素材感を強調したい。」



## 炭研ぎ、漆塗り、はぎ起こし

塗り重ねた漆の表面を炭で研ぎ、凹凸をなくす。貝が漆と同じ高さになるように研ぎ、また、漆を全面に塗り重ねる。漆が乾いて適切な固さになった時、文様を覆う漆膜をはぎ起こすと貝の輝きが見えてくる。



## 蒔絵を施す

貝で牡丹唐草文様を飾り、漆を塗り上げた器に金粉を蒔く。漆に金粉を蒔いて装飾する蒔絵は、日本で生まれた技法だ。さらに漆を塗り、蒔いた金粉を固定させる。





## 毛彫り

螺鈿の仕上げ段階で最も神経の集中を要する大事な毛彫りの工程が待っている。夜光貝を素材とした牡丹唐草文様に毛彫りを施し、花卉の筋や葉脈を表現する。白蝶貝の花喰鳥は、板に仮貼りして毛彫りをした後、天板に嵌め込む。



## 北村インタビュー

北村の語り

「これまでに出会った古典の螺鈿作品の毛彫りには、品格がある。」「貝のように光る素材で品格を出すのは大変難しい。」



瑞鳥唐花文螺鈿箱

## 加飾と完成

貝の表面を細かく荒らし、金粉、朱の顔料などを入れる。器の中央に舞う花喰鳥に色を入れると、鳥の表情が生き生きと見えてくる。古典から学び自分の世界を築いた北村の作品「ずいちょうからはなもんらでんぼこ瑞鳥唐花文螺鈿箱」が、ここに完成した。

## 北村昭斎プロフィール

北村昭斎

昭和13年生れ。本名・北村謙一。

東京芸術大学美術学部で漆芸を学んだ後、父・北村大通に師事。漆工品の保存修理に携わりながら、漆芸作家として創作活動を活発に展開。厚貝螺鈿の技法を中心とする作品を日本伝統工芸展等に発表して受賞を重ね、高く評価される。平成6年選定保存技術「漆工品修理」保持者。平成11年重要無形文化財「螺鈿」保持者。

